

## &lt;論文&gt;

## 先スペイン期メキシコにおける「花の戦い」再考

岩 崎 賢

はじめに

先スペイン期のメキシコ中央高原に強大な都市国家テノチティトラン(1325-1520 A. D.)をうち立てたメシーカ(アステカ)人の神話や祭祀が、彼らの政治的経済的繁栄の基盤であった軍事活動と密接な関係を有していたことは良く知られている。そして宗教と軍事活動の関わりが論じられるときに、とりわけメソアメリカ研究者の関心を引いてきたのが、いわゆる「花の戦い(花戦争) *xochiyaoyotl*」であった。これについて初期のメソアメリカ研究者は、それをメシーカ人と、現在のプエブラ州に本拠をおいていたトラスカラ、 Cholula、トリリワキテペクといった民族集団の間で15世紀中葉以来行われていた、支配地域の拡大を目的とはしない、中央高原で活発に行われていた人身供犠のための捕虜の獲得を目的とした、特殊な戦いであると理解してきた<sup>1)</sup>。こうした見方に対しては比較的近年に部分的な批判がなされ、その起源に関して、それはメシーカ人よりも先に中央高原の南部に定住していたチャルコ人に求められるべきであるという見方が受け入れられつつある<sup>2)</sup>。

それでは「花の戦い」についての議論は、もう十分に尽くされたと考えて良いのであろうか。筆者は宗教史を専攻する者として、メシーカ人の宗教伝統における戦いという行為が有する象徴性に関心があるのだが、その

ような関心のもとで「花の戦い」という名称で問題にされてきた事例を諸史料から検討しているうちに、従来の見方に対して疑問を持つに至った。従来の研究に共通しているのは、「花の戦い」なるものが何らかの制度的実体であるという前提のもとで、その起源なり形式なりを求めるという態度である。しかしむしろ問われるべきは、どのような観点から眺められた場合に、ひとつの戦いが先住民の立場から「花の」と形容されるか、ということである。そもそも戦いとは多様な側面を有しており、故にそれは政治的、経済的、社会的、心理的、宗教的のそれぞれの角度からの説明を許容するものである。特に近代と異なる時代にあっては、ひとつの戦いは強度の違いさえあれ、征服欲、資源獲得、功名心、信仰心といった様々な要素によって複合的に動機づけられているのが普通であろう。本稿が問題にするのはこのような意味での、戦い一般における「花の」と形容される要素である。そして本稿の考察を通して、メソアメリカの中央高原である戦いが「花の」と形容されるとき、そこで問題となっているのが戦いという行為の宗教的超越の次元であることが示されるはずである。

以下では征服直後の史料を随時参照しつつ、「花の戦い」に関する従来の見方がいかなる記述を根拠として成立しているかを検証し、その問題を指摘し、最後にこれに取って代わるべき「花の戦い」についての新たな理解のあり方を提示したい。

## I 初期の研究者による「花の戦い」の理解

メソアメリカ研究が本格的に開始したのは今世紀初頭である。従って本稿で言う初期の研究者とは、初期とは言ってもおおむね今世紀中葉の歴史家たちのことを指している。これらの研究者たちは、いわゆる「花の戦い」という事柄に関して、大枠において二つの点で合意している。その第一点は、彼らの考える「花の戦い」は、テノチティランあるいはそれと同盟関係にあったテスココの支配者——即ちいわゆるアステカ帝国を構成していた三国同盟<sup>3)</sup>のうちの二つの都市国家のいずれか——によって、テ

ノチティトランの東方の、現在のプエブラ州に栄えていたトラスカラや  
 Cholulaを始めとする勢力に対して、15世紀中葉に開始された制度的な戦  
 いだということである。第二点は、この戦いの目的が、第一義的には領土  
 拡大や周辺地域への牽制といった政治的な要素にあるのではなく、むしろ  
 当時盛んであった人身供犠の儀礼のために必要な、生け贄用の捕虜を獲得  
 するという点にあったということである<sup>4)</sup>。

第一点目に関して、「花の戦い」がテスココで開始された制度であると  
 する見方の根拠となっている史料としては、まずテスココの貴族の血をひ  
 く年代記制作者のアルバ・イシュトリルシヨチトルの記述が挙げられる。  
 彼は特殊な形式を備えたトラスカラ勢との戦いが、1454年に起きたとされ  
 る熾烈な自然災害を契機として、テスココ王のネサルコヨトルによって  
 開始されたことを記している。

「メシコの神官たちは神々が帝国に対して怒っており、彼らをなだめ  
 るためには多くの人を生け贄にすることが必要であること、しかもそ  
 れが定期的になさなければならないということを告げた…ネサル  
 コヨツイン（ネサルコヨトル）は…戦いで得た捕虜を生け贄にする  
 べきであると言った…。トラスカラの領主のひとりであるシコテンカ  
 トルは、これ以降、戦いがトラスカラの領地と、テスココ及びその同  
 盟者の領地の中間でなされるべきで、戦いが頻繁になされるための戦  
 場が定められるべきであると言った。そしてそこで捕虜になったもの  
 は神々に生け贄にされるべきであると言った。…またそれらの戦いは  
 月の最初の日になされるべきもので、最初がトラスカラと…、次が  
 ウェシヨツインコがえらんだ戦場で、そして次が Cholula の戦場で…  
 そして再びトラスカラと（戦いがなされるべきであるとされた）」<sup>5)</sup>。

同じテスココ系の年代記制作者のファン・ポマールの記述はより簡潔  
 あるが、この特殊な戦いの創始者をネサルコヨトルとする点を始めとし  
 て、内容的にイシュトリルシヨチトルのものと整合している。ただしそ  
 こでは、戦いがなされる理由は単に人身供犠だけでなく、また戦士の訓練の

ためでもあるとされている。

「(テスココとその同盟者が) 通常行っていた戦いは、トラチカラン(トラスカラ)とウェシヨツインコの人々との間のものであった。それはネサワルコヨツイン(ネサワルコヨトル)の意志によって、二つの事柄のために導入されたのであった。そのひとつは戦士の訓練のためであって……彼らの父たちが努力によって獲得し維持したもの(戦士としての名声・地位)を、その息子たちが怠惰と恥知らずな安穩のうちに引き継ぐのは良いことではなかったからである。……もう一つはより重要なことであって、それは彼らの偶像<sup>6)</sup>への奉仕であって、捕虜たちが彼らの神々に生け贄に捧げられるようにするためである」<sup>7)</sup>。

こうして二人のテスココ系の記録者は、この特殊な戦いが、生け贄を獲得することを目的として、ネサワルコヨトルによって創始されたものであったと報告する。当時の中央高原では、それ以前の時代と比較して実に多くの人身供犠が行われていたということが知られている。その点、生け贄獲得のための制度的な戦いが存在していたとするこれらの記述は興味深いものであり、研究者らによって注目されてきたのも当然の事ではあった。とはいえこれらの記述が「花の戦い」と本質的な関係があるかという点でいえば、後に考察するようにそうは言えないのである。

以上の記述が、三国同盟とトラスカラ勢との間の特殊な戦いの起源をテスココに帰しているのに対して、これをテノチティトランに由来すると報告しているものとしては、いわゆるクロニカX<sup>8)</sup>系の史料であるドミニコ会士ディエゴ・ドゥランの記録、及びメシーカ人の貴族の血をひくアルバラード・テソソモクの記録が挙げられる。これらはともにメシーカ人の何代ものトラトアニ(王)に仕え、その勢力の拡大を支えたとされるシワコワトル(副王)であるトラカエレルを、この特殊な戦いの創始者であると語る。例えばドゥランによれば、それはモクテスマー世の時代(1440-1469 A. D.)に、新しい神殿の完成を祝うのに必要な生け贄を獲得するた

めに、トラカエレルによって設けられた制度であるという。次の部分では、トラカエレルはモクテスマ一世に対して、戦いで生け贄が獲得される戦場を、ものを購入するための「市場」に例えて説明している。

「私、トラカエレルは、この市場がトラスカラ、ウエシヨツインコ、 Cholula, アトリシユコ、トリリワキテペク、そしてテコアクに設置されるべきであると申し上げます。なぜならもし我々がそれをヨピツインコやミチョアカンや、ワステカ人の土地といった遠い場所にしますと、それは難しいものとなり……その遠さの故に我々の軍勢は（行軍に）耐えることが出来ないからです。これらの場所は遠すぎますし、その上、我々の神はこれらの野蛮な民の肉をお好みにならないでしょう。これらの民の肉は神にとって堅く、黄色く、味のないパンのようなものです。

……すぐに我々の戦士たちがそこにたどり着き、そして捕虜を得て戻ってくることでしょう。（その捕虜たちは神にとって）温かく美味なものであろうばかりか、また我々の戦士たちにも喜ばしい狩猟のようなものとなるでしょう。ただ、この戦いは相手を絶滅させるようなものであってはなりません。……我々の神が自ら楽しみ温かいトルティージャを食することを望むたびに、我々はこれらの都市へと向かいましょう。それは人が食料を得るために市場へ行くようなものなのです」<sup>9)</sup>。

こうしてトラカエレルは、生け贄を獲得するための戦いを、トラスカラや Cholula にといた勢力に対して今後、計画的に行っていくことを提案する。テソソモクの記述はこの開始を神殿の完成祝いのためであるとは明言していないものの、内容的にはドゥランの記述とほぼ共通している<sup>10)</sup>。また上のドゥランの引用中には、トラスカラ勢との戦いが「相手を絶滅させるようなものであってはなりません」という一文がある。ここには、メシーカ人はトラスカラ勢に対して基本的に軍事的優位を保っていたけれども、生け贄を継続的に獲得するために取えて減ぼさなかったのだというこ

とが含意されている。

以上に挙げた諸史料が、初期の研究者の「花の戦い」についての理解の最も主要な根拠である。しかしそこには、ある問題点が含まれている。それは即ち、以上の記述をなしたそれぞれの著者たちは誰ひとりとして、この15世紀中葉のトラスカラ勢との——確かにそれ自体は通常の戦争の概念から外れたものではある——特殊な戦いの始まりを、直接的には「花の戦い」の始まりとして語っていないという点である。直接的には、というのは、先のイシュトリルシヨチトルらの引用部及びそれに前後する部分に、「花の戦い *xochiyaoyotl*」,あるいはそれを連想させる言葉（花の戦場、花の死など）が現れていないという意味である。ではなぜ研究者によってこの三国同盟とトラスカラ勢の戦いが「花の戦い」であるとされたかという点、それはテソソモクの史料の中の、このトラスカラ勢との戦いが述べられている部分とは別の箇所では、この戦いは「花の戦い」であったと記されているからである<sup>11)</sup>。しかしながら実際の所、それらの箇所からトラスカラ勢との戦いを「花の戦い」の起源、あるいは典型であるとする見方を導くことまでは不可能である。なぜなら、テソソモクは単にトラスカラを始めとするプエブラ地方の勢力だけでなく、先のドゥランの引用では戦いの相手にはふさわしくないとして除外されていたミチョアカンやヨピツインコ、あるいはメキシコ湾岸のテワンテペク<sup>12)</sup>の勢力との戦いに対してまで、「花の戦い」あるいはそれに類する表現を適用しているからである。例えば、モクテスマ二世がある年中祭祀に招待する相手について、次のように述べている部分がある。

「私はこの祭祀のために、ぜひ我々の敵たち、即ちトラスカラ、トリリワキテペク、ウエシヨツインコ、 Cholula、クエシュトラン、メステイトラン、ヨピツインコ、そしてミチョアカンの者たちを招きたいと思う。そこでは我々とこれらとの間の敵意や戦闘は、ひとまず棚上げにしておいて…このときばかりは、我々が花の戦いと呼ぶところの戦いには触れないようにしておいて、ただ我らの街の祭祀に彼らを招

こう…」<sup>13)</sup>。

このような記述に端的に現れているように、テソソモクの記録では、決してトラスカラ勢と三国同盟の戦いが特に「花の戦い」なるものの起源や典型であるかのように語られていない。むしろそこでは、この語は三国同盟が行った様々な戦いに対して無差別に適用されているのである。こうして、初期の研究者の見解を特徴づける第一点目（トラスカラ勢との戦いをもって起源とする）は、史料を見る限り支持しがたいのである。テソソモクの記述からは、さらに第二点目（純粹に生け贄の獲得のための戦いであるとする）までもが、根拠付けられないことが分かる。なぜならテソソモクが「花の戦い」の相手として挙げる勢力との戦いは、史料を一瞥すれば分かるように、その多くがこの基準に合致しないものだからである。例えば、テソソモクが「花の戦い」であるとするテワンテペクとの戦いについての記述では、これを率いたアウイツォトル王は「誰も捕虜を捕らえることなく、若い者でも老いた者でもすべてが戦場で死を迎える<sup>14)</sup>」ように戦うべし、と命じており、実際そのように戦われたことが記されているのである。

しかしなぜ、初期の研究者の見方がこのような問題点をはらんだまま当然のように受け入れられてきたのであろうか。ここでは近年「花の戦い」について論文を提出したヒックスの指摘が注目される。彼は、従来の多くの研究者の関心が、いわゆる「花の戦い」そのものよりも、むしろスペイン人到来以前のトラスカラ勢と三国同盟との政治的関係の説明にあったと指摘している、即ち、スペイン人が到来したとき、三国同盟の支配地は既にメキシコ湾岸のワステカ人の地域まで、トラスカラ勢を取り囲むように分布しており、その支配力は一見して圧倒的であった。それにも関わらず、なぜ三国同盟がトラスカラ勢を支配下に置くことができていなかったのかということが、スペイン人征服者だけでなく、現代の研究者にとっても一つの問題であった。そこでヒックスによれば、トラスカラ勢を生け贄の確保のために減ぼさなかった、とする先の幾つかの引用に見られる先住民の

立場からの説明が、この問題を解決するものとして多くの研究者によって注目され、またそのまま受け入れられることになったというのである<sup>15)</sup>。もしそうであるとすれば、これは筆者の推測であるが、このトラスカラ勢との戦いの記述はそれ自体が非常に印象的である上に、上のような重要な政治史的問題を解決する事例でもあったために、研究者はこのトラスカラ勢との特殊な戦いに対して何らかの特殊な名称がつけられていたに違いないと考えたのかもしれない。そしてちょうどテソソモクがこれを「花の戦い」という印象的な語で呼んでいるために（実際は先に述べたように、テソソモクはそれを「花の戦い」のひとつとしてしか扱っていない）、それがそのままこの事例の名称として採用されたということことであろうか。

この問題にこれ以上関わる余裕はない。三国同盟とトラスカラ勢との戦いに関する先の記述が、それ自体興味深いものであることは確かである。ただそうではあっても、我々がそれを「花の戦い」の起源・典型として扱うべき積極的な理由は乏しく、それは「花の戦い」としてではなく、当時の中央高原の政治的社会的状況に関する興味深い事例として研究されればよいのではなかろうか<sup>16)</sup>。

## II チマルパインの記述

さて冒頭でも触れたように、ヒックスを始めとする比較的近年の研究者は「花の戦い」の起源の問題として、初期の研究者が——おそらく先述の理由によって——軽視あるいは無視してきた感のある、16世紀のもうひとりの重要な年代記制作者であるチマルパイン・クワウトレワニツインの記述に注目している。これは部分的には正当なことであった。なぜなら以下で見ていくように、そこでは「花の戦い」というものが、より明確な基準とイメージをもって語られているように見えるからである。まず次の、トラコチカルカ人（チャルコ地方に住んでいた一民族集団）とそれ以外のチャルコの人々による、「花の戦い」の様子についての記述を参照されたい。

「1・火打ち石の年、1324年。このとき花の戦いが始まった。それはトラコチカルカ人とチャルコ人全員が、悪魔の像の前に葦をお供えしたときのことであった。葦をお供えするやいなや、人々は慣習と決まりごとに従って、お互いに攻撃し始めた。これが(戦いの)開始の合図であって、この戦いから離脱するのは不名誉なことであった。この「葦のお供え」の祭祀の壮絶さのあとで、人々はうめいたり傷つけあったり、害苦を与え始めた。そこで人が、山ごとに、丘の区分ごとに、集団を分けに入った」<sup>17)</sup>。

ここでは「花の戦い」がいかなるものであったかということが、直接に問題として語られているのが分かる。この記述について幾つかのことが指摘できる。まず一点目は、ヒックスも指摘しているように、これはおそらくチャルコの年中祭祀の一つと推測される「葦のお供え」なる祭祀の一部を構成する、戦いの儀礼の描写だと言うことである<sup>18)</sup>。またそこでは、二つの軍勢に分かれた、チャルコに住んでいた幾つかの部族集団によって戦いがなされたことも読みとれる。第二点目は、これが中央高原で戦いの神として崇拝されていた、テスカトリポカ神に関係する儀礼であつたらしいことである。このことはこれとは別の部分に、この戦いを制御し、最後に戦う者たちを「分けに入った」のが、ケツアルカナワトリというテスカトリポカ神の神官であつたと記されていることから推測される<sup>19)</sup>。ちなみに引用の後半部が示しているのは、この戦いの儀礼が何らかの形で制御不能なものとなってしまったこと、そのため戦いにふける諸集団を「山」ごとに、つまり地区の住民ごと(共同体や地区はナワトル語でアルテペトル *altepetl* 「水の山」という)に分けに入ったということであろう。こうして、ここでチマルパインが「花の戦い」として記述しているものは、年中祭祀においてテスカトリポカ神に捧げられ、その神官によって統御・執行される戦いである、とひとまず言うことが出来る。

さて、もう一つチマルパインが「花の戦い」として挙げるのは、1376年のチャルコ人とメシーカ人の間の戦いである。

「花の戦いがチャルコ・アテンコで行われ、アメケメ人が言うにはそれは八年間続いた。メシーカ人の貴族たちは、チャルコ人を捕まえたのちに、彼らを解放し、そのままメシコの街へと帰っていった。チャルコ人の貴族もメシーカ人を捕まえたら、同じことをして、彼らを解放して、チャルコの街へ帰っていった」<sup>20)</sup>。

続けて、1414年のメシーカ人とチャルコ人の戦いについての記述を引用する。

「この年に壮絶な戦いが起きたが、その時にはチャルコ人によって捉えられたメシーカ人の貴族はもはや解放されなかったし、メシーカ人に捉えられたチャルコ人の貴族もまた自由の身にはならなかった。こうしてこの年の頃には、花の戦いは、もう四十年ほど前から朽ち果ててしまっていたのである」<sup>21)</sup>。

ヒックスは以上のチマルパインの記述を根拠として、初期の研究者とは違った結論を出している。彼は特に上の記述で、戦いの後に捕虜が解放されなくなって「花の戦い」が「朽ち果ててしまっ」という部分に注目する。そして「花の戦い」を定義して、それはチャルコ人によって創始された、通常の征服戦争とは全く異なる制度的営為であり、そこでは儀礼用の生け贄の獲得は必ずしも重要ではなく、専ら戦士の軍事的訓練が目的であるような、非宗教的な営みである、と主張している。しかしながら、このヒックスの結論の出し方はあまりにも早急である。そもそも、生け贄の儀礼とは必ずしも結びつかないということだけから「非宗教的」であるというのは、チマルパインの最初の引用で「花の戦い」が「葦のお供え」という年中祭祀の一部とされていることを考えると無理がある。またこれを純粋な軍事的訓練であるとするのは、ミチョアカンやテワンテペクといった遠隔地で行われた過酷な征服の戦いをも「花の戦い」と呼んでいるテソノモクの記述と、大きく矛盾することになる。つまり彼の結論は、初期の研究者のそれに劣らず難点が多いのである。

ヒックスを含めた「花の戦い」に関する従来の理解に共通するものは、

それらがいずれも「花の戦い」なるものが何らかの制度的構築物であるという前提のもとで、その起源なり形式なりを求めるという態度である。卑近なたとえで言えば、そこでは、「花の戦い」という名称を持った、「サッカー」や「柔道」のような特定のルールを備えた制度が存在したかのよう  
に議論がなされているのである。そうであるが故にそこで問題になるのは、専らその具体的なルールの有りようや起源だけなのである。「花の戦い」がそのようなものであれば、その起源も正統な（本来的な）ルールも存在するであろう。しかし筆者の考えでは「花の戦い」とはなんら制度的実体ではない。そして以下で明らかになるように、「花の戦い」というものが存在したのではなく、むしろ戦いという行為に「花の」と形容される要素が存在したのである（従ってまた、以下の議論では「花の戦い」という表現をやめ、本稿の視点に即して「花の」戦いという表現を用いることにする）。しかしそうであるとすれば、一体「花の」戦いとは、戦いのどのような側面を語ろうとしているのであろうか。ここで結論を先取りして言えば、ある戦いが「花の」戦いと形容されるときに問題になっているのは、当時の中央高原において戦いという営みが強く有していた、宗教的超越的次元なのである。このことを明らかにすべく、以下では従来の研究が参照することのなかった事例をもとに、議論を進めていく。

### Ⅲ 「花の」戦いとは何か

まず我々は、先のチマルパインの記述で「花の」戦いの典型とされていた、「葦のお供え」の祭祀における戦闘について、もう一度考えてみる必要がある。なぜならこの記述に注目したヒックスを始めとする研究者は、それを単に起源の問題において取り上げているだけで、この戦闘がいかなる宗教的文脈でなされたものであるかということは、ほとんど問題にしてい  
ないからである。先に筆者は、チマルパインが「花の」戦いとして記述しているものについて、それをひとまず、年中祭祀においてテスカトリポカ神に捧げられ、その神官によって統御・執行される戦いである、と指摘

しておいた。しかしこれ以上この儀礼的戦いの詳細を知ることは難しい。なぜならこのチャルコの儀礼については、チマルパイン自身はもとより、他の史料にも詳しい記述がなされていないからである。しかしその詳細を類推するというのであれば、それは決して不可能ではない。研究者は総じて、スペイン人到来直前の中央高原の諸都市国家が政治的経済的に極めて密接な関係を保持し、またその宗教伝統にも高度な共通性があったことを認めている。そして以下で見ていくように、我々はフランシスコ会士ベルナルディーノ・デ・サアゲンによる、同じ中央高原のテノチティトランの年中祭祀についての詳しい記述の中に、極めてこのチャルコの祭祀と類似したものを見いだすことができるのである。それはテノチティトランの18の年中祭祀のうちの15番目、パンケツァリストリと呼ばれる祭祀を構成する儀礼的戦いである。我々がこの儀礼に注目するのは、なによりもまず、サアゲンがこの祭祀において戦う戦士たちを「花の死を迎える者 *suchimjcuque*<sup>22)</sup>」と呼んでいる点にある。18の年中祭祀の中には戦闘的な要素を持った儀礼はいくつか存在するが、そこでサアゲンがこの「花の」という形容を用いるのは稀である。戦いにおける「花の」と形容される要素を問題にしようとする我々の立場にあつては、「花の死」や「花の戦場」といった言葉は「花の」戦いと同じ宗教的文脈で理解されるべきものであり、この語が現れている時点でパンケツァリストリは「花の」戦いを議論する上で重要な事例と見なされるに十分である。

さてパンケツァリストリはメシーカ人の守護神であるウイツィロポチトリに捧げられる祭祀であり、この神の分身パイナルに扮した者がテノチティトランの大神殿を起点に、トラテロルコ、トラコパン、コヨアカンといった重要な都市を駆けめぐり、各地で生け贄を屠りながら、再び大神殿へと戻ってくるというものである。そしてこの神が各地を駆けめぐる間に、二手に分かれた戦士集団によってかの儀礼的戦闘が行われる。先のチマルパインの引用では、儀礼的戦闘を統御するのは戦いの神であるテスカトリポカ神の神官であったわけだが、パンケツァリストリの場合も、それが第

一にウィツィロポチトリの祭祀であるにもかかわらず、テスカトリポカは重要な役割を果たしている。次のサアグンの記述では戦士たちがいかなる装いを凝らしていたかが示されている。

「人々は彼ら（戦士）の下肢から太股，腕から肩まで青い縞模様を描いた。彼らの顔も水平の縞模様で彩られ，それぞれ淡い青と，黄色の縞がつけられた。そして彼らに弓の形の鼻飾り，それと羽のついた葦の頭飾りがつけられた」<sup>23)</sup>。

この縞の彩色はテスカトリポカ神の図像学的特徴を示しており<sup>24)</sup>，彼らが儀礼においてこの神の化身であると考えられていたことを示している。メソアメリカの宗教の専門家であるロペス・アウスティンによれば，この地域ではしばしば人間が特定の神々の本質 (esencia) を身に宿すことで「人神 hombre-dios」となり，それが儀礼において重要な役割を果たしていたと論じている<sup>25)</sup>。この点，パンケツァリストリにおいて戦う戦士たちの姿は「人神」として，即ち生身の形をとった戦神テスカトリポカそのものとして受けとめられていたに違いない。

さて戦闘はもうひとりの「人神」であるパイナル神が街を一巡している間に，アカチナンコという場所で二つの集団に分かれて戦われた。一方はウィツナワクの人々であるとされており，これは主に貴族の者たちが住む地区であり，またこの集団には王から戦闘服と盾が授けられることからして，これは特に貴族階級の戦士たちによって構成された集団であったと考えられる。他方の集団は，それ以外の平民が住む地区を代表する戦士たちであった。こうしてこの戦闘は貴族と平民の間で戦われたのであるが，それが特に貴族の者たちに有利なものであったわけではないことは，サアグンの次の描写から窺われる。

「ウィツナワク側に与する戦士たちは槍をもって戦い，それを投げつけた。そして（もう一方の）聖別を受けた者たちは，専ら羽のついた矢をもって戦い，それを投げつけた。それには矢尻がついていた。そうして戦いは行われ，そこには多くの死があった。ウィツナワク側に

与する者たちのなかで、捕らえられた者があれば、彼は死ぬこととなった。聖別を受けた者たちがこれを殺した」<sup>26)</sup>。

こうして戦いは貴族も平民も基本的に平等な条件で、生死を賭して真剣に戦われたのである。その激しさは、戦いが終わったとき、すべての戦士が力を使い果たして地に倒れ込み、彼らを正気づかせるのには、耳たぶをナイフで傷つけるという荒っぽい手段が必要であったとされていることにも示されている。このパンケツァリストリの戦闘は、それを制御する神官によって終了が告げられる。その終了は、街を一巡してきたパイナル神の「人神」が戦場にたどり着くのを契機としていた。

「そして監視者、戦いを見守る者は、パイナルが既にやってきつつあるのを認めたとき、次のように叫んだ。『メシーカ人よ、今や彼がやってきた。今や主が参られた。もう十分だ』」<sup>27)</sup>。

こうして戦士たちはそれぞれの集団ごとに再び分かれ、戦闘は終了する。この戦闘が最初から最後まで神官に制御されたものであることは、テスカトリポカ神の神官によって制御されるチャルコの「葦のお供え」の戦いの場合と同じである。先のチマルパインの記述におけるチャルコの儀礼的戦闘は、年中祭祀の一環として、テスカトリポカ神の神官の統御のもとで行われる、ときに統御不可能な状態に陥るほどの壮絶さを伴う戦いのことであった。パンケツァリストリの戦闘はその点で、それがテスカトリポカに扮した両戦士集団による、真剣な戦いであったということから、チャルコの「葦のお供え」に極めて類似したものであったと考えられるのである。以上の点をふまえると、年中祭祀において行われる、テスカトリポカ神と深く結びついた、命を賭けた戦いは、優れて「花の」戦いと呼ばれるべきものであったと考えることが出来よう。

次に取り上げるのは、再びテソソモクの記述である。先に述べたように彼は、アウイツォトル王によるテワンテペクへの遠征は、特に生け贄の捕虜獲得を目的とするわけではなく、むしろ我々が通常考えるような——即ちその勝利が支配力や租税地域の拡大を結果するような——戦いであった

としているのであるが、そこでは戦士たちが今や戦いを始めようとする場面での、次のような注目すべき記述がある。

「隊長たちは戦士たちのひとりひとりを励ました……隊長たちは花の戦場 Xuchi yo oyoc において死ぬことの偉大なる勇気と名声を語った……兵士たちは嗚咽をもらし涙を流し、死ぬか勝つかと思いつつ、もはや決して互いを見ることができないかのように、立ち上がってお互いに抱き合った」<sup>28)</sup>。

ここには我々が「葦のお供え」やパンケツァリストリにおいても確認した、死を賭した壮絶な戦いという要素が如実に現れている。それは決してヒックスの言うような軍事訓練などではない。そしてまた興味深いことには、そこで戦う戦士たちは、ちょうど先の二つの祭祀においてそうであったように、自らのすべてを戦いの神であるテスカトリポカ神に委ねるのである。次の一節は上の引用と同箇所に見える、戦士たちの妻による祈りの言葉である。ちなみに文中の「風と夜」「我らは汝の奴隷」という語は、テスカトリポカ神の最も有名な呼び名である。

「我が良き主よ、汝は風と夜なり、汝の思うままになされよ、我らは汝の奴隷なり、我らの孤独と悲しみをもって行く我らの夫、汝の僕に哀れみを…」。

以上のテワンテペクの戦いはいうまでもなく年中祭祀の一部ではない。従って年中祭祀において行われる戦いに限らず、テスカトリポカ神に身を捧げた戦士たちによる、命を賭した戦いであれば、いずれの戦いも「花の」戦いと呼ぶうるものであったと理解することが出来る<sup>29)</sup>。しかしもしそうであるとすればは、事実上あらゆる戦いに対して適用され得るような「花の」という形容は、果たして戦いという行為のどのような要素を指向しているのであろうか。

#### IV 戦いの宗教的次元

ここで本論が注目したいのは「花と歌 in xochitl in cuicatl」と呼ばれるナワトル語の詩歌のいくつかである。これらの詩歌は1560年から1570年にかけてサアグンの指示によって編集されたと言われる『ナワトル詩歌集』に収録されているものであり、その多くがアンヘル・マリア・ガリバイによってスペイン語訳され出版されている。メソアメリカ宗教の専門家であるレオン・ポルティージャによればこの「花と歌」は、先住民にとって「隠喩やシンボルで人間を昇華させ…人間の根源へ近づける」ものであり、「一種の認識であり、また人間の内なる経験から湧きでる」ものであった<sup>30)</sup>。この先スペイン期の中央高原の住民たちの宗教的志向性を顕わにする詩歌が「花」という語を含んでいること自体、本稿にとって非常に示唆的なことである。こうして以下ではこの「花と歌」を手がかりに、「花の」戦いというものをいかに理解すべきかを考えてみたい。

さて先の考察では、テスカトリポカ神に身を捧げた戦士たちによる、命を賭した戦いであれば、それは優れて「花の」戦いと呼びうるものであったと述べた。その点で次の詩歌はまさに「花の」戦いを描写するものである。文中のトラカウエパンとはテスカトリポカの別名である。

「大地にのぼりがはためき、もつれ合う／死をもたらす黒曜石の花  
itzmiquixochitl が、交差する…／そこにいるのはトラカウエパン／あ  
あトラカウエパンよ、あなたは自ら望んで見に参られた／黒曜石の刃  
による死を…／あなたの黄金の肌は貴石で飾られ／大地の中央であな  
たは悦に入る」<sup>31)</sup>

サアグンの記述に見たとおり、テノチティランの戦士たちは、パンケツァリストリの祭祀においてテスカトリポカ神の装束を付け、「人神」となって命を賭した戦いを行った。この上の詩もまた、戦いの熱狂の中で、自ら戦神の化身となって荒れ狂う戦士たちの姿を描いたものと見なすことができよう。ちなみに取り立てて指摘されることはあまりないようであるが、実はこの詩歌にも見えるようにガリバイが編集しているナワトル詩歌

のかなりのものが、戦いをその主題としたものになっている。その全てを検証することは紙面の都合上不可能であり、ここでは難解な詩歌の中から筆者にとって比較的意味が明瞭なものを取り上げていることを断っておく。さて戦いと「花」とがメシカ人たちの宗教的地平において根元的な結びつきを有していたことは、次の詩歌にも明瞭に見て取れる。

「そこに沸き立つ、そこに広がる／篝火が波打つ／栄光がもたらされる、盾が栄光となる／鈴の上に埃が立つ／ああ戦いの花 yaoxochitl は決して止まない……／大地の中央に／我らの上に香りがもたらされる／ああ誰が（その香りを）望むのか／そこに喜びと栄光がある……／戦いの大地で／心臓の花 yolloxochitl が生み出される」<sup>32)</sup>

ここでは最後の「心臓の花 yolloxochitl」という表現が注目される。メシカ人の宗教伝統においては心臓とは身体の中でも象徴的な意味で極めて重要な場所であり、そこにおいて人は神的・超越の次元との関わりを有していたといわれている<sup>33)</sup>。そうであるとすれば、ここで言われている「花」とは、戦いを通して実現される神的なものとのつながり、あるいはそのようなつながりによって到達される一種の体験的境地を指すものではないか。次の二つの詩歌はこの見方を支持するものであるように思われる。

「……ここメシコ・テノチティランは／盾の家、戦闘の家／ここは鷲の戦士団があるところ／それは虎の戦士団があるところ／ここでは戦いが行われ、戦闘のあえぎが起こる／煙の盾の花はここに……／彼らは生を与える者の美しい花を楽しむ／なぜあなたは王子たちを苛まれるのか、王子たちの心臓は痛い／彼らは何をすることが出来よう／戦いの花が開く／盾の花は私の手にある／私は花によって喜ぶ／鷹の花、鷲の花によって喜ぶ」<sup>34)</sup>

「……私の心臓は、戦いの花で酔っている／それは私を占拠する／私は戦いの花に酔っている……／それはここでの体験だ／天空の中で私は戦いの花に酔う」<sup>35)</sup>

前者に見える「生を与える者」とは、やはりテスカトリポカ神のよく知られた別名である。こうして「美しい花」とはテスカトリポカ神に本来的に属し、また戦いにおいて獲得され、人に陶酔をもたらす何かである。以上の詩歌の内容から、筆者はメシーカ人の宗教伝統において「花」というものは、神的・超越的次元との関わりを通して到達される、満悦や陶酔の体験的境地を指す言葉ではなかったかと考えている。「花」という語をこのように一種の体験的境地を表現するものとして理解するならば、テノチティトランの祭祀のパンケツァリストリヤチャルコの「葦のお供え」、そして、テワンテペクの戦いの例で見たような、テスカトリポカ神の化身となって命を賭して戦う戦士たちの戦いが、「花の」戦いであるとされることの意味も理解されるのではないか。なぜならそこにおいてねらわれているものは、「人神」となること、つまり戦神との神秘的な合一の境地であると考えられるからである。

戦いという営みがある特殊な体験的境地を有するということは、既にジョルジュ・バタイユによって指摘されていることである。彼はクラウゼヴィッツの『戦争論』以来、長らく保持されてきた戦争についての一般的理解——戦争とは政治的行動の選択肢のひとつであり、政治的目的を達成するための手段である——の枠を越え出て、特に近代以前の伝統的社会における戦いのあり方に注意を払いながら、戦いという営みの自己目的的性格とそれが秘めるある種の超越性を指摘している。自身メシーカ人の戦いに強い関心を持っていたバタイユは、メシーカ人の社会はいわゆる「軍事的社会」などではなく、むしろそれは「好戦的社会」と呼ぶべきものを示していたと論じている。彼によると前者が戦いという営みが、政治的経済的勢力の拡大と発展の手段とされるような社会であるのに対し、後者は、第一義的には、戦いそれ自体が目的として求められるような社会である。そしてそのような自己目的的な戦いが実行される時、そこには祝祭というものが一般に有している、ある独特の性格が優れて顕わになるというのである<sup>36)</sup>。祝祭とは通常は単なる気晴らしの機会であると考えられがちで

あるが、パタイユがこの語に与える意味はより積極的である。それは何かの役割を果たすことで特定の目的に奉仕するという意味での有用性を有する諸存在者から、その役割や有用性が剥奪されることで、それらが本来有している超越的次元が回復される場である。即ち、祝祭においては人は主人でも奴隷でもなく、また親でも子供でもないような状況が様々な手法で現出されるのであるが、そこで人は高い体験的境地に達し、惰性的日常において見えにくくなってしまった超越的次元を回復するというのである。

「戦争行動は、個人の固有の生の価値を否定的に賭に投入することによって、独特の様式で個人を解体する方向性を持っている」<sup>37)</sup>。メシーカ人たちが戦いに望むとき、彼らは死を覚悟することによって、——少なくとも戦いの間だけは——世界内における自らの個人的役割や地位といったものから解放される（即ち「個人が解体される」）。戦いにおいて死を受け入れるということは世俗的価値の放棄を意味し、そのことによってメシーカ人たちは、その先にある法悦の「花の」境地へと開かれるわけである<sup>38)</sup>。

## 結び

以上の考察によって、従来の研究が想定したような「花の戦い」と呼ばれるような制度的実体が存在するのではないということ、そしてテソソモク、チマルパイン、サアゲンらの記述において問題になっているものが、「花の」と形容される、戦いという行為の宗教的超越的次元であることが示されたのではなからうか。冒頭で述べたように、メシーカ人たちの行っていた戦いは様々な側面から理解されうるものである。それらは間違いなく領土拡大や資源獲得、人身供犠のための生け贄の獲得、さらには戦士の軍事訓練など様々な要因によって動機づけられ得るものであったし、また場合によってはこのうちの一つの要素が他の要素に比べて飛び抜けて大きな意義を持つこともあったであろう。しかしながらメシーカ人たちの戦いにはこれらの要素に還元し得ない、もう一つの、「花の」という形容によって示される超越的要素が存在していたのである。従来の「花の戦い」

の研究は、戦いがこのような次元を持ちうる営みであるにもかかわらず、それを考慮してこなかった。それ故に「花の」戦いの本来的な意味が理解されることなく済まされてきたのではなかろうか。

#### 注

- 1) 次を参照せよ。George Vaillant, *Aztecs of Mexico* (Garden City : Doubleday, 1941), pp. 99–100 ; Alfonso Caso, *The Aztec People of the Sun* (Norman : University of Oklahoma Press, 1958), p. 14 ; Jacques Soustelle, *The Daily Life of the Aztecs on the Eve of the Spanish Conquest* (New York : Macmilan, 1962), pp. 100–101 ; Michael Coe, *Mexico* (New York : Praeger, 1977), p. 134.
- 2) 次を参照せよ。Frederic Hicks, “Flowery War in Aztec History,” *American Ethnologist*, vol. 6, no. 1 (1979), pp. 86–87 ; Burr C. Brundage, *The Fifth Sun : Aztec Gods, Aztec World* (Austin : University of Texas Press, 1979), pp. 203–208 ; Nigel Davies, *El imperio azteca*, trans. by Guillermina Feher (Mexico : Alianza Editorial, 1992), pp. 274–285.
- 3) 三国同盟を構成するもう一つの都市国家はトラコパンであるが、他の二国に比べて殆ど政治的主導権を持たなかった。
- 4) 例えば今世紀中葉の代表的なメソアメリカ史研究者のひとりである、ジャック・スーステルの次の文には、以上のような見方が端的に現れている。「……戦争は……捕虜を生贄にすることを可能ならしめた。したがって、闘は敵を殺すことよりも、できるだけたくさん生け捕りにする方向にむけられていた。征服の拡大そのものによって、メキシコの大部分に平和が訪れると、国王たちは神に生贄を捧げることを目的としたトーナメント試合、「花戦争（花の戦い）」を思いついた。1450年の大飢饉は数年来、生贄があまり行われなくなったために起こったと考えられた。闘技は、怒れる神々の心を鎮めたにちがいない。国王たちが時刻の領土の真中にある、トラシュカラ（トラスカラ）という敵の領地を寛大に扱っていたのは、おそらく戦争を決して終わらせまいよという意図があったからであろう」。ジャック・スーステル『アステカ文明』狩野千秋訳、白水社、1971年、95–96ページ。
- 5) Fernando de Alva Ixtlilxóchitl, *Obras históricas*, vol. 2 (México : Editorial Nacional, 1965), pp. 206–207.
- 6) 以下の諸々の引用に現れる「偶像」や「悪魔」といった表現には、先住民の宗教に対するキリスト教徒の偏見が現れている。これらは勿論、先住民にとっては「神々」と呼ばれるべきものである。
- 7) Juan Bautista Pomar, “Relación de Tezcoco,” in *Nueva colección de docu-*

- mentos para la historia de México*, vol. 3, J. García Icazbalceta, ed. (México : Imprenta de Francisco Díaz de León, 1891), pp. 41–42.
- 8) クロニカ X とは征服直後にナワトル語で書かれたと推測されている古文書で、それ自体は消失し現存しない。この古文書をもとにしてドゥラン、トバル、テソソモクは自らの歴史書を作成したと言われる。これを「クロニカ X」と名付けたのはアメリカ人のメソアメリカ研究者であるロバート・バーロウである。その研究史に関しては次を参照されたい。井上幸孝『『クロニカ X』——研究史と問題点』『古代アメリカ』第3号, 2000年3月, 67–82ページ。
- 9) Diego Durán, *Historia de las Indias de Nueva España e islas de la Tierra Firme*, vol. 2 (México : Editorial Porrúa, 1984), pp. 232–233.
- 10) Alvarado Tezozómoc, *Crónica mexicana* (México : Editorial Porrúa, 1967), pp. 362–363.
- 11) *Ibid.*, p. 541, 590 y 624.
- 12) テワンテベクの場合にはその戦いが「花の戦場 Xuchi yo oyoc」でなされたと言述されている。デヴィーズ [Davies, op. cit., p. 275] に倣って、テソソモクはこの語を「花の戦いの場所 xochiyaoyoc」という意味で用いているものと考えられる。
- 13) Tezozómoc, op. cit., p. 590.
- 14) *Ibid.*, op. cit., p. 541.
- 15) Hicks, op. cit., pp. 87–91.
- 16) 以上の事例に現れるトラスカラ勢と三国同盟の特殊な戦いに関しては、ムニョス・カマルゴの記録を始めとするトラスカラ系の史料を用いてこの問題を考察している次のイサクの研究を参照されたい。ただ彼にしてもいわゆる「花の戦い」に関しては初期の研究者の見方を基本的に共有しているのであり、その根本的な問題点は解決されていないようである。Barry L. Isaac, “The Aztec Flowery War : A Geopolitical Explanation,” *Journal of Anthropological Research*, vol. 39, no. 4 (1983), pp. 415–432.
- 17) Chimalpahín Quauhtlehuanitzin, *Relaciones originales de Chalco Amaquemecan* (México : Fondo de Cultura Económica, 1965), pp. 152–153.
- 18) Hicks, op. cit., p. 88.
- 19) Chimalpahin, op. cit., p. 177.
- 20) *Ibid.*, p. 82.
- 21) *Ibid.*, p. 89.
- 22) Bernardino de Sahagun, *Florentine Codex*, Book 2, trans. by Arthur J. O. Anderson and Charles E. Dibble (Santa Fe : The School of American Research

and The University of Utah, 1981), p. 141. 原文では suchimjcque であるが、おそらく xochimicque 「花の死を持つ者」の意であろう。花は xochitl, 死は miquiztli.

- 23) Ibid., p. 142.
- 24) 同箇所て注釈者のアンダーソンとディブルは同じ見解を示している。
- 25) Alfredo López Austin, *Hombre-dios: Religión y política en el mundo náhuatl* (México: UNAM, 1973), p. 121.
- 26) Sahagún, op. cit., p. 146.
- 27) Ibid.
- 28) Tezozómoc, op. cit., p.541. 注12を参照せよ。
- 29) しかしここで次のような反論があるかも知れない。それは、中央高原の宗教伝統においては、戦いとテスカトリポカ神に関係があるのは当然のことであり、また戦いは常に死者を生むものであるから、結局すべての戦いが「花の」戦いではないか（しかし、それこそ筆者の主張であるのだが）。そうだとすれば、先のチマルパインの記述において、捕虜が解放されなかった1414年のメシーカ人とチャルコ人の戦いにおいては、もう「花の戦い」は「朽ち果ててしまっ」ていた、とされていることに矛盾するのではないか、というものである。確かにチマルパインの先の記述は問題である。しかし筆者が考えるところではこれは、戦いの後に捕虜が解放されなかったことによって、その戦いが「花の戦い」ではなくなってしまった、という意味ではない。むしろそれは1376年の、捕虜を解放していた戦いとと比較で語られていることからして、この1414年の戦いが、戦いという営みが有する「花の」という形容をすべき要素を希薄にしてしまった、という意味に取られるべきである。即ち、生け贄用の捕虜の獲得という、全く別の要素が戦いに混入したことによって、それは「花の」という要素を相対的に希薄化してしまったということである。
- 30) ミゲル・レオン＝ポルティーヤ『古代のメキシコ人』山崎真次訳、早稲田大学出版部、1985年、184ページ。
- 31) itzmiquixochitl は文字通り訳せば「黒曜石の死の花」。黒曜石は itztli. Angel MA. Garibay K., *Poesía náhuatl*, vol. 2 (México: UNAM, 1965), pp. 53-54.
- 32) Ibid., pp. 11-12. 心臓は yollotli.
- 33) ロペス・アウスティンのメシーカ人の身体についての議論によると、メシーカ人にとって身体とはそれを取り巻く大宇宙と共通の構造を持ち、相互に照応する小宇宙としての意味を持っていた。アウスティンは特に身体の三つの部位に宿る「魂」においてこの照応が実現されていたという。ひとつは天空に由来し頭部に宿るとされたトナリ tonalli, 次は地下世界に由来し肝臓

に宿るとされたイヨトル *ihiyotl*, そして最後がその中間領域としての地上に対応し、心臓に宿るとされたテヨリア *teyolia* である。López Austin, *The Human Body and Ideology*, vol. 1, trans. by T. O. de Montellano (Salt Lake: University of Utah, 1988), p. 188.

34) Garibay, op. cit., p. 25.

35) Ibid., p. 29.

36) ジョルジュ・バタイユ『エロチシズム』室淳介訳, ダヴィッド社, 1968年, 70-71ページ。同様にロジェ・カイヨワの次の一節も参照されたい。「もう戦争には、戦争以外の目的はない。戦争は全体として、秘蹟と法悦、象徴と秘儀にほかならない。そしてこの高みからみれば、占領は無論のこと、勝利でさえも、その目的性を喪失する。人は戦争から、いわば人類の変貌を期待するようになる。つまりこの変貌のうちに、一人ひとりが生命と人間性との本質を発見する。戦士は戦争によってきたえられ、戦争によって、白熱的な存在にまで高められる。それはかれを焼きつくして、かれを眩い造化とすることになる」。ロジェ・カイヨワ『聖なるものの社会学』内藤莞爾訳, 筑摩書房, 2000年, 200ページ。

37) ジョルジュ・バタイユ『宗教の理論』湯浅博雄訳, 人文書院, 1985年, 75ページ。

38) このことは年中祭祀において行われる死を賭した戦闘儀礼が、戦いにおける「花の」と形容されるべき要素を優れて顕わにするものであったという、先の我々の考察と相通じるものである。そこでは戦神テスカトリポカに生死をゆだね、あるいはこの神の「人神」となって、戦士は戦うわけであるが、そこでねらわれているのはこの神との神秘的合一である。興味深いことに、テスカトリポカ神の多くの呼び名の中には「双方の敵」というものがある。これはこの神が戦いの神でありながら、決して片方の軍勢のみを守護するような神ではなく、むしろ二つの戦士集団の間の敵対性を煽動する神であることによる。このことは、「花の」戦いが法悦の体験的境地を求める戦いであり、そこで戦士たちが指向し、対峙するのが、この神（との合一）であるということに照応しているように思われる。